

学会だより No. 83

2006年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

第64回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第64回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2006年7月1日（土） 13：30～17：00

会場：上智大学7号館14階特別会議室

プログラム

研究発表 13：30～15：45

前田綾香（本学博士前期課程）

本来性へと呼び戻すものとしての「良心の呼び声」

ハイデガー『存在と時間』における良心現象の分析をめぐって

鈴木伸国（本学博士後期課程）

J.G.フィヒテ『エアランゲン知識学』における<信>のための予備的考察

絶対的反省と絶対者

紺野茂樹（日本学術振興会特別研究員）

「共苦」とそれが拓く地平 ホルクハイマーを読み解きながら

講演 16：00～17：00

堀江 聡（慶應義塾大教授）

プロティノス神秘体験表白箇所之余波

懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階第1会議室

会費：3,000円

講演要旨

プロティノス神秘体験表白箇所之余波

堀江 聡（慶應義塾大教授）

プロティノスのテキストが放つ魅力には二通りあると思われる。一つには、プラトンやアリストテレスと同じ土俵で哲学的思考を展開している箇所であり、もう一つは、自身の神秘体験に裏打ちされているとおぼしき箇所である。そして、まさにこの後者こそが、プロティノスをして新プラトン主義の嚆矢たらしめるに力あったことは贅言を要さないであろう。無論、両側面は分かちがたく絡み合っている。しかし、読者・聴衆にアレルギー反応を惹き起こさない箇所を選別することもまた可能なのである。しかし、今回は敢えて彼らしい発言に触れてみたい。ただし、哲学的余波の瞥見という緩衝材を添え木することで、ありうべき反感の懐柔に努める。

それは『エンネアデス』第4論集第8論文[6]の冒頭で、「しばしば私は肉体から自己へと目覚め、他のものから外に出て自己の中へ入った。驚嘆すること甚だしい美を眺めると、そのときほど高次のものの一部に属することを確信したことはなかった。最善の生で活動し、神的なものと同一になり、神的なものに座を占め、かの活動へと入り、自己を他の可知的なもの一切を超えたところに据え置いた。神的なものにおけるこのような静止の後に、知性から思惟へと私は降下する……」のごとく、己の神秘体験を表白している箇所である。

後代にいかにかこの箇所が印象的に映ったかは、9世紀バグダードに登場する『アリストテレスの神学』（流布版）が本歌取りし、16世紀ラテン語訳で伝承される別版（長大版）で、さらなる？本歌取りが行われ、イブン・スィナー（980-1037）は前者に注釈をつけ、照明学派の祖スフラワルディー（1154-1191）も引用していることから一目瞭然である。今回の報告は、これらそれぞれが提示する異なる解釈はプロティノスの原文が孕む曖昧さ・問題性を暗示しているという点と、後続の者による改鑄は、それ自身の輝きをもちうると指摘することにある。

研究発表要旨

本来性へと呼び戻すものとしての「良心の呼び声」

ハイデガー『存在と時間』における良心現象の分析をめぐって

前田綾香（本学博士前期課程）

我々は、マスメディアから情報を得、周りの人々とおしゃべりをし、身の回りの出来事を伝統や習慣から判断しつつ、毎日を送っている。「世間」の内に身を置きつつ、他の人々と共に居合わせ、常に一定の先行了解を出発点として物事を解釈しているのである。そこではさしあたり、物事や他の人々、自己自身の真のあり方は隠蔽されている。ハイデガーはこのような日常的に潜む隠蔽を「頹落（Verfallen）」と呼ぶ。いつも既に「頹落」してしまっている我々は、真なる自己の了解へどのように到達し得るといえるのか。

平均的な日常を送る我々を、突如として「不安（Angst）」が不気味さの内へと陥れる。根本

気分としての「不安」は、何らかの対象を恐れることではない。「不安」は、我々が一定の歴史的世界の内に既に投げ込まれてあるという「被投性の原事実」に由来する。我々は了解やその解釈によって世界を（投企的に）開くことができるが、それは常に「被投性」の制約の内でのみ可能なのである。そのつど一定の範囲で見通しのきいている我々の世界、すなわち「現（Da）」は、我々が「開く」ものであるし、かつ我々に対して「開かれている」。

「不安」の途方もない不気味さの中で、音もなく「良心の呼び声」が呼ぶ。「呼び声」は、世間に埋没している我々の自己を呼び止め、世間の喧騒を遮断する。そして、我々を、おのれの「現」をおのれ自身が引き受けねばならない、という単純なしかし究極的な「被投性の原事実」に突き当てる。この呼び声に聴き従うのなら、我々は、おのれの固有な可能性を、世間からではなく、おのれ自身が選択することを選ぶことに至る。

本発表では、このような自己の真なる可能性の開示を呼び起こすものとしての「良心の呼び声」を、頹落した日常的な「語り（Rede）」を変様させるものとして捉えていく。

*

J.G.フィヒテ『エアランゲン知識学』における<信>のための予備的考察 絶対的反省と絶対者

鈴木伸国（本学博士後期課程）

本発表は、ベルリンでの三度に亘る知識学連続講義の翌年、その「再結合」として企図された『エアランゲン知識学』における<信>(Glaube)を主題化するための予備的考察である。

まず共有され易い論点から始めれば、知性観の近代的転換は人間知性の自立性を主題化する、と言える。その転換は、人間知性の振る舞いの説明根拠を世界秩序に求めることから、逆に後者の現象根拠を前者の内に探求することへの転換である、とするのが近代思想家たちからする概ねの主張であろう。人間知性と世界との間での立場の入れ替えである。しかしそこで提示される構図は新たな帰結を生む。その構図とは、それぞれ人間知性と世界とに分けて置かれてきた説明者と説明根拠という二つの役割が共々人間知性の内に置き入れられるというものであり、その帰結とは、人間知性が自身を省み自身の内部から、説明している自身と説明されるべきものを、二つながら一挙に語り出さねばならないという哲学的責務である。人間知性は世界と、そして自分自身のいわば創造者として振舞うことを課されるのである。そこにただの反省ではなく絶対的反省が、ドイツ観念論において主題化される契機がある。

近世的なこの反省問題の持つアポリアを始めて主題化したのがフィヒテであり、十数回繰り返された彼の知識学の発展の中心的課題は絶対的反省の完遂、あるいはその可能的条件の探求であったと言われる。この知識学の系譜の中で『エアランゲン知識学』（1805）のもっとも特徴的な主題の一つは、知の側からの絶対的な反省可能性の否定と、その反省限界での知の立脚点獲得における知の挙動の観察である。この反省限界において知は自身が反省されるものとしては、絶対的他者として現れるべきことを見出し、そこに直接的な絶対的反省の不可能性が確認される。そこで知はそれまで反省の内に想定してきた「絶対性」という理念を、確かに「絶対者」として主題化し直すことを強いられ、またそこでそもそも絶対者が知の対象とされうるか否かが問題とされる。知自身であるべき絶対者は、絶対者である限り知の側からの関わりかけ

一切を排除する「自己に閉じた」ものであるべきであり、その限りで知の側からの関わりは非妥当的である。しかし知が遂行されている限り、絶対者を介しての知の成立は妥当すべきである。フィヒテはこの限界的洞察において「絶対者を絶対者として」思惟するという云わばシュミレーションを介して、そこに知が自身を知として確認使用とする限り、知にとって構成的な契機を主題化する。それが<信>と呼ばれる。

本発表ではこの問題設定の必然性を反省理論を背景に主題化することとしたい。

*

「共苦」とそれが拓く地平　ホルクハイマーを読み解きながら

紺野茂樹（日本学術振興会特別研究員）

本報告の目的は、「共苦(Mitleid/compassion)」概念の内実・意義・可能性の究明に存る。従来「同情」と訳されてきた、この“Mitleid”という語に、報告者が初めて出会ったのは、ホルクハイマーにおいてであった。そして更に遡ると、彼が最も大きな影響を受けた、ショーペンハウアーへと辿り着く。

この共苦を中心とする倫理学、すなわち「共苦倫理学(Mitleidsethik)」は、歴史的には“pitié”（ルソー）や“sympathy”（A. スミス）、近年では“humanity”（マルグリット）といった、情念や感情に基盤を置く、倫理学潮流のうちに数え入れられる。まず冒頭で、隣人愛の教えや「善きサマリア人」の譬え以来、西欧思想史の中で脈々と続いてきたものの、伝統的にその主流であった理性至上主義の陰で、傍流だと見做されてきたこの伝統を、哲学史に概観する。

続いて、ホルクハイマー等を発展的に読み解きながら、今日でも、あるいは今日だからこそ、説得力を持つような共苦とは、如何なるものであるべきかを追究する。その際この規範概念としての共苦が、単なる情念や感情ではなく、理性や意志をも含み込んだものであることが明らかにされよう。

とは言え、共苦の暗い側面にも触れておかねばならない。すなわち、「我々」よりも幸福な「彼女等/彼等」に、「我々」以上の苦しみを味わわせることで、己の満たされぬ幸福への憧れを癒そうとする、「否定的公平(Negative Gleichheit)」願望として機能するそれにある。これはホルクハイマー等の扇動政治研究の主題であり、丸山眞男が「抑圧委譲」と呼んだものである。

最後に試論として、エゴイズムと利他主義や自己保存と共苦の二元論を超えた、地球市民の普遍的な連帯としての、「共苦の連帯(Solidarität des Mitleids)」構想を提起し、報告全体の結びとしたい。